

教育学部生における大学入学前と在学中の 教職志望意識とその要因

○谷口沙樹¹・谷本隆太¹・江戸友香¹・大谷亮介¹・加藤佳佑¹・石野陽子²

(¹島根大学教育学部学校教育課程 I 類初等教育開発専攻・²島根大学教育学部)

〈目的〉

高等学校在学時における進路指導教員による進路指導が生徒の教員志望意識に与える影響調査と、進路指導の質の向上を図るための改善案の提案を行なう（研究①）。また、進学後の教育学生が学部内において、統一されたカリキュラム、同じ講義を受けているにも関わらず、在学中に教職志向性に差が生じるのはなぜか、その外的要因の調査と考察を行なうこと（研究②）を本研究の目的とした。

〈方法〉

調査方法：質問紙法（6 件法）

日時：2017 年 7 月 20 日（1 回生）、7 月 24 日（2 回生）8 月 21 日（3, 4 回生）であった。

調査対象者：島根大学教育学部の全専攻 1, 2, 3, 4 回生男女であった。

配布部数：130 部（1 回生）、140 部（2 回生）、104 部（3, 4 回生）であった。

回収部数：163 部（1, 2 回生）82 部（3, 4 回生）

有効部数：153 部（1, 2 回生）72 部（3, 4 回生）

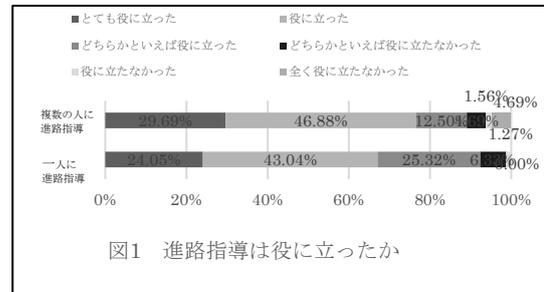
配布方法：質問紙を授業の最後に直接配布。1 回生は 1 週間を期限とし、指定した場所に回収箱を配置し回収した。2, 3, 4 回生は回答した人から質問紙を直接回収した。

調査内容：1 「高校在学時における進路指導はどのようなものだったか。また、それらは自分の進路決定において役に立ったか」 a～f (a<f)

2 「教職志向性に差が生じる外的要因には、どのようなものがあるか」 a～f (a<f) ※f になるにつれ教職志望方向に影響を与えており、a になるにつれ非教職志望方向に影響を与えている。

〈結果〉

研究①の結果より、各項目に χ^2 検定を行ったと



ころそれぞれの項目には有意性は見られなかった ($p > .10$) (図 1)。また、研究②より、いくつかの質問項目において高い正の相関が得られた。一つ目は、「講義を聞いて、教師という仕事をそれまで以上に面白く感じたことがある」という回答と、「各種学校（大学を除く）の基礎体験活動は教職志向性になりた方向に影響を与えたと感じている」という回答であった。二つ目は、講義を聞いて、教師という仕事をそれまで以上に面白く感じたことがある」という回答と、「社会教育施設の基礎体験活動は教職志向性に影響を与えた」という回答であった。三つ目は、「教育実習を体験して、教師としてやっていく自信がなくなったと思う」という回答と、「教職の基礎的理解に関する科目（教育課程論・各種指導論など）は教職志向性に影響を与えた」という回答であった。

〈考察〉

結果より、どのような進路指導であっても、担任やクラブ活動の顧問などの一人に進路指導してもらっても、複数の人に進路指導してもらったとしても、進路選択に関して役に立つ度合いは変わらないということが明らかとなった。また、研究②の結果より、島根大学教育学部における基礎体験活動や教育実習など子どもと関わる活動は教職志望意識に大きく影響しているということが指摘された。また、大学の講義によって教職志望が高まった学生は、基礎体験活動や教育実習でも、教職志望が持続する傾向にあることが示された。